
蠟燭の灯火

上月

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

蠟燭の灯火

【コード】

N1695D

【作者名】

上月

【あらすじ】

消した命に自分自身も消される話。

重い瞼をゆっくりと開けて、目に光を取り込んだ。目が痛むほどの眩しい光に、思わず強く瞼を閉じた。暫くすると、光は和らぎ、恐る恐る再び瞼を開いてみると、視界に真っ白な空間が広がった。その息を呑むほど白い空間には果てがなく、夜のあのしんとした、妙にあたたかな薄暗がり恋しくなるほどだ。

ふと足元にぬくもりを感じ、視線を下へずらすと、無数の蠟燭がゆらゆらと火を揺らしながら延々とその空間に比例するようにあちからこちらに立てられていた。まだ真新しい蠟燭や、火の消えてしまった蠟燭、もうずっと長い間灯りを湛えていたのか、地面との距離がほとんどないほど短い蠟燭もある。それが、ずっとずっと向こうの方まで、ぼくが見える視界の先まで続いていた。

しゃがみ込んで蠟燭に触れてみると、蠟燭はまるでぼくに敵意でも抱いているかのように、蠟燭の火がぼくの指先を覆った。ぼくは慌てて手を振りながら引いて、火から逃れるともう片方の手でその手を握る。ちくり、と指が痛んだ。軽い火傷をしたんだろう。

蠟燭の灯りは相変わらず穏やかに揺れたまま、ぼくが触れようとするとき以外は至って柔和だ。

ずっとしゃがみ込んだまましていると、不意に遠くの方で、ゆらりと何かの影が揺らいた。ぼくははっとして、顔を上げ、目を凝らす。目を細めてよく見てみると、華奢な体つきの、制服を着た髪の長い女の子が悲しそうに目を伏せながら、屈みこんでひとつの蠟燭を手にした。女の子の涙がぼとり、と一粒蠟燭に落ちて、蠟燭の火はしずかに消えた。女の子の、哀婉でありながらもどこか安堵したような美しい表情にぼくは魅せられる。すると、女の子は突然ぼくの方へと眼差しを向け、それからぼくを襲った火と同じように敵意と憎悪を剥き出しにしたような瞳でぼくを睨みつけてから、背を向けて

どこかへ消えていった。

それからしばらくして、今度はどこかで見たことのあるような四十歳後半ぐらいの、少し痩せこけた男が現れた。着込んでいるスーツがやけに不似合いだ。その男も、先ほどの女の子と同様に、大分短くなった蠟燭を手にすると、悲しげに涙を落として蠟燭の灯りを消した。そしてまた、深い憎しみを突き刺すようにぼくを睨んでから、消えてしまった。

そんなことが何度も、何十回も続いて、一体ここはどこなんだろうとよくやく疑問を胸に抱きはじめてたころ、またもや人が現れた。しかし今回は、全く見知らぬ人物でも、どこかで見かけたような、記憶の曖昧な人物でもなく、ぼくが完全に見知った人物だった。白い肌、下から血の色の差した程よく赤い頬、大きく鋭い目、細身で姿勢がよく、女性特有の細く長い髪が歩くたびに揺れている。この女とは、何度も顔を合わせた。女がぼくに注ぐ恨みをぼくは幾度となくかわし、ぼくが飄々と生きていることがどうしても許せない、と面と向かって彼女に言われた覚えもある。女もまた、ここに現れた皆と同じように、涙を落とし蠟燭の灯りを消し、そして心底恨めしそうにぼくを睨みつけてから、赤い口紅が塗られた小さな唇を動かし、「あんたが死ねば良かったのよ」とだけ吐き捨て、そして消えた。

ぼくはその場に呆然と立ち尽くし、それから「ああ」と納得したふうになんか声を漏らす。ここは、自分が殺した人の墓場なんだな、と認識してから、がくりと地面に膝をついてもういない女の後姿を追うように、ずうつと遠くを見つめた。蠟燭の灯火は相変わらずゆらゆらと揺れていて、あるひとつの蠟燭からぼとり、と熱によって溶けた白い蠟が、ぼくのいる白い空間に吸い込まれた途端、視界が灯火のように揺れた。

重い瞼をゆっくりと開けて、目に光を取り込んだ。目が痛むほどの眩しい光に、思わず強く瞼を閉じた。暫くすると、光は和らぎ、

恐る恐る再び瞼を開いてみると、視界に見慣れた自室の天井が広がった。部屋いっぱいには漂う懐かしい香りのする空気を肺いっぱい吸い込む。額に浮かんだ汗を拭いて、深くため息をつく。そうしてようやく、先ほどのあれは夢だったのだ、と頭の中で理解した。ちよつと昨日からインテリアとして起きはじめた洒落た蠟燭を数本、部屋に飾り始めたのがきつかけだろう、とぼくはほつと肩の力を抜く。

ぼくはベッドから起き上がると、ぼさぼさになった髪を手で撫で付けながら洗面所へ向かった。

蛇口を捻り、ばしゃばしゃと水で顔を洗うと、手探りにタオルを引つ掴んで顔を拭いたあとゆっくりと頭を持ち上げる。鏡を覗き込んだ瞬間、ぼくはあつと息を呑んだ。鏡に映った、無数の蠟燭の姿に、ぼくはよろよろと後ろへ数歩下がる。そして即座に、後ろを振り返った。が、何も無い。鏡へ再び目を向けると、もうそこに蠟燭の姿はなかった。きつと、さっきの夢が頭の中に出てきたんだ、と自分で自分を宥めるように心の中で言い聞かせた。

タオルを首に掛け、リビングに戻ると、ガラス製の大きな丸テーブルの上に、分厚い書類が置かれていた。ソファに腰掛け、足を組んで書類に手を伸ばす。一瞬だけ、夢の中で感じた火傷の痛みのようなものがちくりと指を刺激したが、気にしないようにして書類を手にした。

書類の一枚目には、「患者の不審死について」と記されていた。二頁目をめくってみると、そこには、公にはなっていないものの、自分の医療ミスや指示ミスで死に至らしめたひとりの患者の顔が、惜しげもなく堂々と載っていた。三頁目をめくると、また顔、四頁目も顔、とそれは何十頁にも続いていた。ぼくはあまりの恐怖と気持ち悪さに思わず書類を床に放り投げると、逃げるようにベランダへ向かった。

ベランダに出ると、冷たい空気に小さく身震いする。高層マンションの最上階となれば、無論風もきつい。手すりをつかんでぐつと

身を乗り出して下を見てみると、ミニチュア模型のように並んだ建物や道路、それに街路樹や道を歩く人々がずいぶんとちっぽけな存在に思え、たまらず笑ってしまった。

すると、その瞬間、汗ばんでいた手が原因か、それともつよい突風が原因か、がくりと体勢を崩し、前のめりになったまま誰かに背を押されたようにベランダからぼくは落ちた。何の前触れも無い、どうしようもない死への衝突に、ぼくは無意味に空を足掻く。肺が圧迫されたように、息ができず、なんともいえない恐怖に口から心臓やらが今にも出てきてしまいそうだった。排泄物が体内から出ていくのをどこか遠くで感じたが、今はそんなことすら考えることができなかつた。ごおごおと風の音が耳を劈く。

あまりにも速い落下の速度に、ぼくは意識が薄れていくのを感じた。

開け放たれたベランダの戸から、強い風が部屋の中へ入り、ゆらゆらと揺れていた、まだ新しい蠟燭の光が、ふっと音を立てることもなく静かに消えた。

――了

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1695d/>

蠟燭の灯火

2009年3月24日09時25分発行